

若原英明著

『イギリス革命史研究』

今井 宏

一九八六年、五〇歳を越えたばかりの若さで病魔に倒れた若原英明氏の訃報を耳にしたのは、かなり遅くなつてのことであつた。いま氏の遺稿集である本書を前にして、幾多の感慨が胸中を去来する。若原氏にはじめてお会いしたのがいつのことであつたか、はっきりしないが、成瀬治氏が北海道大学にいかれる前に立教大学で教鞭をとつておられたとき、氏のご紹介によつてお互いに大学院学生であつたころのことであつたような記憶がある。少なくともイギリス史のご専門である松浦高嶺氏が立教大学にご就任になるよりも以前のことであつたことだけは、たしかである。それ以後ときどき研究会などの席上でお目にかかることがふえたが、おりから社会経済史の全盛時代にあえてイギリス革命の政治史を研究領域に選んだ筆者にとって、後述す

るように最も専攻の近い、そして最も鋭い批判者が若原英明氏であつた。

本書に収められた論文は、病床に残されていた「アイルランドにおけるクロムウェルの『決着』」という未定稿を含めて総計一〇編。一九五八年から一九八一年に至るまで、氏の母校である立教大学の『史苑』ならびに勤務先であつた立教高等学校の『研究紀要』に孜孜として執筆しつづけられたすべての成果がこの一巻に収められている。筆者としては、それぞれの論文は発表のたびごとに贈られて数多くのご教示にあずかったものばかりであるが、こうして一巻にまとめられたものを通読する機会をえて、あらためてさまざまな感慨にひたつたことであつた。書評というよりもそうした感慨を中心にして、あらためて氏の研究の軌跡をたどり、ひろく氏の業績を紹介したいというのが、本文の意図するところである。

ところで考えてみるとその感慨は主として次のふたつに由来する。まず第一にここに収められた論文をその発表順に並べてみると、そこには若原英明氏というひとりの研究者の三十年にも及ぶ研究の軌跡をたどることができるだけでなく、ありていにいって日本におけるイギリス革命研究の関心の変遷を如実にうかがい知ることができることである。収められた論文のうち最も古いものは、一九五八年に

発表された、左翼民主主義の源流を明らかにする「イギリス革命におけるレヴェエラーズ運動」（第一部第一章）であり、ついで革命に登場する各党派の社会層をそれらが提出した改革プログラムを基礎に検討した「イギリス革命の革命勢力」（同第二章）がつづく。この二論文はまさにわが国においてイギリス革命研究が本格的な展開をみせはじめた一九五〇年代末から六〇年代初頭において設定された中心的な研究課題を氏が正面からうけとめてみずからの研究の出発点とされたことをはっきり示している。ついで「クロムウェル政権の財政問題」（同第五章）、「革命の軍隊——ニュー・モデル・アーミー」（同第四章）といった革命の政治過程を考察するのに不可欠なテーマが対象としてとりあげられている。さらにかのかしなかった論争の鎮静化をうけて、氏はヨークシャーに材料を求めて「ジェントリ経営の一断面」（第二部第三章）を検討し、ひいては革命解釈の新たなテーゼとして論議的になった「宮廷」と「地方」の問題」（同第二章）を論じ、最後には「長期議会とロンドン民衆」（第一部第二章）、ついで政治的な風土を支えた文化の基底をなす「一六・七世紀の教育革命——二つのイギリス国民の形成」（第二部第四章）、そして未完に終わった「アイルランドにおけるクロムウェルの『決着』（第一部第六章）へと、氏の視野は民衆史・社会史・帝国史

へと広がりを見せている。このようにみていくと、先にも述べたように氏の研究歴には、さながらわが国におけるイギリス革命研究史の軌跡があざやかに投影されているだけでなく、それがひいてはイギリスの学界における研究動向をも忠実に反映させたものであったことが判然としてくる。

このようないかたをすれば、あるいはあたかも氏の研究関心が、ただ内外の研究状況に忠実に従っただけのものであったかのようなうけとられかたをするかもしれない。そこにもうひとつ、氏の研究の余人には替えがたい特徴が存したことを見逃すわけにはいかないからである。それは氏が何よりも正確な史実の追求を尊重され、新奇な概念に頼ったり、理論的な提言をしたり、粗雑な概括を試みたりすることに對しては、きわめて慎重な態度をとりつづけておられたことである。先にあげたそれぞれのテーマに関して、氏はなによりもその問題に関するその時点における最高の権威と目された研究書・論文を丹念に読了して、それに基づいて正確なデータを豊富に提出し、それらのデータを素材にしてこの革命の複雑にして多面的な性格に迫ることを意図しておられた。全般としてこの革命研究に学問的な次元を開いたS・R・ガードナーの緻密な大著が参照されていることはいうまでもなく、「ニュー・モデル・アーミー」を論じるにあた

っては、ファースの古典的な名著『クロムウェルの軍隊』（一九〇二年）を、またクロムウェル政権の財政問題を検討するにあたっては、アシュレイの『護国卿クロムウェルの財政・商業政策』（一九三四年）とM・ジェイムズの『ピューリタン革命期の社会問題と社会政策』（一九三〇年）といった、当時においてはまず必読すべき基本的な文献が主要なよりどころとされている点に、若原氏のきわめて着実な学風が雄弁に物語られている。このことは比較の後期に書かれた論文においても変わることはなく、後でもふれる「宮廷」と「地方」の問題」（第二部第二章）を究明するにあたっては、G・E・エイルマーの『国王の役人』（一九六一年）を、さらに「ジェントリ経営の一断面」（第二部第三章）をさぐるにあたってはJ・T・クリフの『ヨークシャー・ジェントリ』（一九六九年）を、また「長期議会とロンドン民衆」（第一部第三章）の場合はB・マニングの『イギリスの民衆とイギリス革命』（一九七六年）を主要な典拠とするなど、イギリスにおける研究状況の進展を的確に把握し、とるべき研究に鋭い触覚を働かして、それぞれのテーマに必須の文献を選びとって利用されている点、は、必ずしもそれぞれの論文の執筆時点におけるわが国の西洋史研究における史料的な制約までを想起しなくとも、およそ後学のひとたちにとっても模範とすべきものである

といっても過言ではあるまい。ほぼ同時期に右にあげたような文献を手にして勉強を進めることのできた筆者にとつて、この点でも感慨はひとしおであった。

そのうえ若原氏の業績がもたらした貢献といえるものは、氏が選びとった文献にもとづいて基礎的なデータを丹念に整理して提出されていることである。たとえば先にふれた「宮廷」については、当時の中央政府諸機構および宮廷内機関とそれを構成する主要な官職をこまかに検討したうえで、革命前夜における官職保有の意義を論じるという周到な手続きを踏まれている。また「ニュー・モデル・アーミー」についてもその母体をなす議会軍各部隊の具体的な分析からはじめて、誕生したこの軍隊を構成する騎兵、歩兵などの各連隊を兵員数はもとより士官・兵士の給料とその支払い状況を調べあげ、さらに主要な士官の出身階層の一覧表をつけるといふ綿密な作業がなされている。ここにみられる基礎的なデータの提示という点だけをとってみても、本書をして数多いイギリス革命研究の中でも他には替えがたい貴重な存在たらしめているといえるであろう。そこで惜しまれるのは、ページ数の制約もあったであろうが、「索引」がつけられていないため、本書に盛り込まれたこの貴重なデータが必ずしも十分に利用しきれない恨みが残ることである。

本書の構成は著者みずからの作成されたメモに従って行われたようであり、また著者みずからが加筆・訂正されていた箇所は「できる限り取り入れ」たとのことであるが、徹底的な加筆・修正は不可能であったため、たしかに本書にはそれぞれの執筆の時点を反映して、若干の論旨の不徹底さと矛盾がみられることは事実である。故人がみずから編集にあたられたら、そのうち幾つかは修正されたかもしれないし、若原氏自身のひとつの完結したイギリス革命像が提示されることにもなったはずであり、あらためていうまでもないが氏の急逝が惜しまれてならない。しかしながら先にも述べたように本書のひとつの価値は、わが国におけるイギリス革命研究の軌跡をひとりの研究者に託してたどることができるところにあるのであるから、個々の論文の執筆時点における問題関心のありようの違いから生まれてくる矛盾ともいえるものは、それじたいを研究史の証言としてうけとめるほうが望ましいであろう。とりわけ残されていた二組の草稿から著者の意図されたであろう構成を的確に再現することに努められた「アイルランドにおけるクロムウェルの『決着』（第一部第六章）」を収録するなど、本書の編集にあたられた鶴川馨氏を始めとする友人諸氏のご努力には頭の下がる思いがする。

しかしながらただひとつ残念なことは、氏のイギリス革

命研究の問題意識を簡潔に語っている「イギリス革命研究のあり方をめぐって」（第Ⅱ部第一章）が、一九六四年に発表された古い方（『史苑』第二五巻、第一号）が収録されている、それからほぼ一〇年後に書かれたほぼ同名の論文（『イギリス革命研究のあり方について』『イギリス史研究』一七、一九七三）が割愛されていることである（本書の随所にこのふたつの論文を混同した注記の誤りがみられる）。前者において著者は「ブルジョア革命としてのイギリス革命像が、現在かなり動揺している」（四二九ページ）という認識にたちながらも、依然として古典的・マルクス主義的なブルジョア革命像に固執しておられた。ところが後者は、吉岡昭彦氏によって光栄にも「トリー・史観とその転化形態」として一括された、『岩波講座世界歴史』に発表されたイギリス近代史に関する諸論文、とりわけ今井の「イギリス革命」（同講座第一五巻収録）を徹底的に批判することを意図して書かれたものである。自分の論文が著者の攻撃的になっていくという個人的な問題としてではなく、まさにこの二つの論文をはさむ十年間にイギリス革命研究には大きな転機が訪れているようにみうけられるのであり、氏自身もそこでの重要な論点のひとつであり、「概念内容が不明確である」と今井をきびしく批判された『宮廷』と『地方』の問題」（第Ⅱ部第二章）をあらため

て姐上に上せるといふかたちで、戦後におけるわが国のイギリス革命研究の誠実な継承者としての立場からさらなる革命像の進化を希求しつづけておられるからである。その意味でいまだに生硬な発言の域をでなかった一九六四年の前者よりも、「従来の市民革命観そのものに再考の余地がある」と明言されるに至った一九七三年の後者が収録されるべきであったし、またそれこそが氏の研究に新たな展開がみられるようになった時期以降の諸論文を収録された第Ⅱ部の冒頭を飾るにふさわしかったと考えられるのである。この蕪雑な紹介のペンをおくにあたって脳裏によみがえってくるのは、ありし日の若原英明氏の悠々迫らぬ温顔である。氏の霊の安かならんことを祈るのみである。

（一九八八年十二月、未来社、A5判 六一九ページ、

七〇〇〇円）

（若原英明氏は一九六六年本学西洋史専攻博士課程満期退学、今井宏氏は東京女子大学教授）